

福岡県下で見出された緑化樹の病害 (続の2)

福岡県林業試験場 小河 誠 司

福岡県下で見出された緑化樹の病害について一覧表を作製するとともに報告のないまたは少ない2~3の病害について報告する。Cercospora 属菌については林業試験場の小林享夫博士に同定を依頼した。

1. ビブラナム・デビディの褐斑病(Cercospora tinea)

病徴 ; 葉に黒褐色から暗褐色の不整円状斑が作られる。病斑周囲は2~3mmの赤紫色帯で囲まれるが、この赤紫色帯は健全部に近づくにつれ淡くなり、境界付近では黄緑色となる。病斑が10mm前後に拡大すると病斑中心部は灰褐色から褐色となる。葉裏は濃褐色帯で縁どられた褐色病斑であり、毛ば立った灰緑色の子実体はこの葉裏の病斑に主に作られる。

ノート ; Viburnum属植物上にCercospora 属菌が記録されたのは本邦では香月⁶⁾によるガマズミ、(V.dilatatum) 上での記載が最初でついで山本・前田⁷⁾によってこの病害に斑点病の名が与えられた。後に香月¹⁾はゴモジュ(V.suspensum)を本病の新寄主として追加し、さらに小林⁵⁾によりゴマギ(V.sieboldi)が新寄主として追加された。小林⁵⁾はViburnum植物上に1927年原がGnomoniella koreana Hara による病気に対し斑点病の名をつけていることを指摘し、ガマズミ、ゴモジュ、ゴマギ等Viburnum属植物のC.tinea 菌による斑点性病害に対して褐斑病の名を与えることを提唱している。そこで当場見本園で発生したV.デビディのC. tinea菌による斑点性病害もこれになり褐斑病とし、C. tinea菌の新寄主として記載する

2. カギカズラのすすかび病 (新称) Cercospora sp.

病徴 ; 葉に褐色不整円状斑が作られる。葉縁部に病斑が作られることが多い。病斑はやがて拡大して葉枯状となり黄変落葉する。

ノート ; 本病は当場見本園植栽のカギカズラ、(Uncaria rhynchophylla) 上に1977年秋に見出されたものである。Uncaria属植物上にはCercospora 属菌による病気の記載はない。このカギカズラのCercospora 属菌の形態等は別途詳細に検討することにし、本報告ではUncaria属植物上にCercospora 属菌が見

出されたことを記録するとともに、他植物のCercospora 属菌による新しい病気に小林等がすすかび病の名を与えているので、筆者もUncaria属植物のCercospora 属菌による葉枯性の病気をすすかび病と呼ぶことを提唱するにとどめる。

表-1 福岡県下で新たに見出された緑化樹の病害

	寄主名	病名
落葉広葉樹	オオデマリ	(Cercospora tinea) ^{a)}
	マメザクラ	(Cercospora prunicola)
	キングサリ	褐斑病 ^{b)}
	ミズメ	(Cercospora) ^{a)}
	セイヨウカエデ	うどんこ病(Sawadaea) ^{c)}
	シモツケ	〃 (Podospaera) ^{a)}
	ツノハシバミ	さび病
	ツタ	さび病
	トサミズキ	(Phyllosticta) ^{a)}
	ナツツバキ	(Cercospora) ^{a)}
常緑広葉樹	ハクウンボク	(Cercospora) ^{a)}
	ヤマハンノキモドキ	(Cercospora) ^{a)}
	ヤマトアオダモ	(Cercospora fraxinites) ^{a)}
	Viburnum debidii	(Cercospora tinea) ^{a)}
常緑広葉樹	カギカズラ	(Cercospora) ^{a)}
	シャリンバイ	(Septoria) ^{a)}
	アラカシ	(Endothia) ^{a)}
	クスノキ	(Botryosphaeria) ^{a)}
	〃	(Guignardia) ^{a)}
	シュロ	炭疽病 ^{d)}
	ツバキ	(Phyllosticta) ^{a)}
樹	ヤバネヒイラギモチ	白も病 ^{a)} すず病 ^{a)}
	タイワンイヌグス	白も病 ^{a)}

a) 病名なし。b) 香月・小林(1975)日植報16(1)

c) 本間(1937)北大農紀8(3)

d) L. M. T. M., and J. Anthony(1970)Malayan For.

その他は日本有用植物病名目録

3. セイヨウカエデのうどんこ病

病徴 ; 葉の表面に3mm前後の白色でうどん粉をまぶしたような類円状斑点が作られる。斑点は後に拡大して全面を覆うようになるが、ところどころに菌糸の発達しない部分が作られマダラ紋様を呈する。葉縁部の斑点は鋸歯先端をカナメとした扉状斑である。また、葉裏にも病斑が作られるが菌糸叢がうすく葉の緑が透けて見える感じである。病斑が5~10mm位になると子実体が作られるが、子実体は最初白色球状であり次第に黄色味を帯び褐色から黒褐色のち黒色となる。

病原菌の形態 ; 子のう殻は130~160 μ で上下にやや変形した球形円盤状である。冠毛は子実体側面から上部に作られ、中途から2分し先端部が内側に渦巻き状に曲り込んだ形で大きさ120~170 μ 、単胞、隔膜はなく非常に数が多い。子のうは10個前後内生しVモン形で大きさ62.5~87.5 \times 37.5~47.5 μ 、内部に楕円形、無色、単胞の子のう胞子を6~8個含んでいる。

ノート ; 本病は1977年当場見本園で発生したものである。Acer属植物にはSawadaea属菌によるうどんこ病が3種と種名が明らかでないものが1種報告されている。丹田^{31,4)}らが本間の文献²⁾と調査をもとに記載した3種と筆者のセイヨウカエデ(A. platanoides)のSawadaea属菌を比較すると冠毛の長さ、形状等はS. bicornisに極致しているが、子のう殻の大きさと内生される子のう数に若干の差異が認められる。しかし、その差異は左程のことはなく、冠毛の長さ・形状が極致していることからセイヨウカエデのうどんこ病菌をS. bicornisとし、新寄主として記載する。

4. シモツケのうどんこ病

病徴 ; 灰白色のうすい菌糸叢が網目状に葉表面を走る。やがて葉全体が灰白色になるが、うすい菌糸叢の時から子実体作られる。子実体は最初微細な半透明球状で、やがて大きくなり冠毛を有する。子実体は冠毛を有した当初は冠毛を含め半透明であるが次第に黄色~褐色~濃褐色~黒褐色になる。冠毛は子実体の成熟とともに褐色半透明から濃褐色に変ずる。

病原菌の形態 ; 冠毛の先端は又状に分岐し唐草模様を呈する。子のう殻内に内生する子のうは1個で子のうの外皮は厚膜細胞である。子のうは扁球形で、子のう内に含まれる子のう胞子は卵形からレモン状で有色、単細胞である。

ノート ; 本病は1978年春当場見本園で発生した

ものである。シモツケ(Spiraea)植物のうどんこ病に平田がPodosphaera oxyacanthaeを記載している。

また、シモツケ(S. japonica)には丹田らによればSphaerotheca humuli菌が寄生する。

本報のシモツケのうどんこ病菌は冠毛の形態・子のう殻内で内生する子のう数などから考えPodosphaera属菌であることは間違いない。しかし、本報までに本菌の冠毛長、分岐数、冠毛数、隔膜数および子のう殻、子のう等の大きさを調査していないので本間・平田²⁾のいうP. oxyacanthaeに属するものかどうか判定できない。そこで今回は当県のシモツケ上にもPodosphaera属菌が寄生することを記載し、その病徴を述べるにとどめた。

5. タイワンイヌグスの白も病

病徴 ; 最初葉に緑味の強い淡緑褐色紋様状の2mm前後の病斑が作られる。病斑は次第に拡大し10数mmに達するものもある。拡大途中5mm前後になると病斑中心部は灰褐色に変色し、さらに拡大するにつれて白味が濃くなり、10数mmになると病斑中心部は灰褐色部分の紋様がなくなり茶褐色となる。しかし、健全部との境界1~2mmは緑褐色で病斑の最先端部は黄緑色である。

ノート ; 本病は当場見本園内のタイワンイヌグスに発生したものである。白も病菌(Cephaeleuros virescens)は多犯性で色々の樹木にその発生が知られるがタイワンイヌグスに寄生したという報告がないので、新寄主として記載する。

引用文献

- (1) 香月繁孝ら：日菌報，16(1)，15，1975
- (2) Ho MM Y.：北大農紀要，38，318~376，1937
- (3) 丹田誠之助ら：農学集報，18，124~128，1973
- (4) 丹田誠之助ら：農学集報，21，29~30，1976
- (5) 小林亨夫：森林防疫，22，274~275，1973
- (6) 香月繁孝：日植病報，20(3/4)，72，1955
- (7) 山本和太郎：兵農研報，農生編，4，41~91，1960